

日本と韓国における蛇婚姻譚類の比較

—「針糸」型に見る昔話の「共有地域」の可能性について—

曹 玉 蘭

要 旨

日本と韓国に伝わる類似した昔話の中で、蛇婚姻譚類の「針糸」型の話を比較する。「針糸」型の話は、日本の『古事記』の三輪山伝説と関わりがあること、また同様の話が中国や韓国にも見られると指摘されている。このような「針糸」型の話の共有地域を確認し、その地域に焦点を合わせつつ、日韓両国の昔話を比較する。韓国の「針糸」型の話と日本の「子供出世」型の話とを比較し検討してみた。その結果として、両国の「針糸」型に、蚯蚓と蛇との違いはあるものの、話の内容、その背景としての婚姻習俗から見て、両国の話は共通の昔話世界を持つものと認めることができた。

キーワード：蛇婚姻譚／針糸／蛇婿入り／夜来者／三輪山伝説

1、本論文の目的

日本と韓国¹、両国の社会は、地理的・歴史的に密接な関係にあり、その社会のあり方において類似点も多いが、相違点も多い。社会というものは、様々な要素、例えば自然や文化などの要素によって形成されているが、それら社会の基底にある諸要素が複合的に表現されて成立したものの一つに昔話がある。昔話は長い年月語り伝えられてきているため、昔話の中にはその担い手の歴史、信仰、慣習、世界観および希望や笑い、または生活を通じて得た教訓や逆境に耐えられる知恵と勇氣などが表れているのである。そこには、担い手たちの考え方や、その彼らが気づかずにもっている文化が籠められている。この意味で昔話には、両国の社会的、文化的な諸特徴が色濃く表現されていると考えられる。大きく言えば、このような昔話の比較検討を通じて、日韓両国の社会や文化の特質をより明らかにしてみることが、本稿の研究の目的である。同時に、それらが昔話の中でどのように表現されているかを考察することで、両国の社会をある意味でその基底において理解し、その類似性と相違性とを明らかにすることを目的とする。

ただし、両国とも、全国一律に同じ話が伝わっているわけではない。国の内部で相異なる話が伝承されていることもあれば、国を越えて、類似の話が伝承されていることもある。そのため、日本と韓国に伝わる類似した話を探し、地域別に分類したうえで両国における昔話の共有地域をも確認し、その地域に焦点を合わせつつ、日韓両国の昔話を比較したい。このような両国における昔話の共有地域の可能性としては、「日本＋韓国の一部地域」、「韓国＋日本の一部地域」、「日本の一部地域＋韓国の一部地域」の三種類の地域があり得る。本論文では、日韓両国の蛇婚姻譚類の「針糸」型を中心に日韓両国あるいは両国の一部地域で共有されている話を探し比較して、昔話における両国の関係を明らかにする。

蛇婚姻譚の「針糸」型とは、昔話の分類を試みたアンティ・アルネとステイス・トンプソンの方法²に倣い、日本の昔話について関敬吾が行った分類³において用いられた名称で、『日本昔話通観』の蛇婚姻譚をみると、毎晩女のところに男が通って来るので、両親が糸を通した針を着物につけ、次の日糸をたどっていき、男が実は蛇だと分かる話である。先行研究でも、「蛇婿入り」系の「針糸」型に分類されている話が『古事記』の三輪山伝説と関わりがあること、また同様の話が中国や韓国にも見られると指摘されている。稲田浩二・稲田和子の『昔話ハンドブック』では、次のように述べられている。

「蛇婿入り」は、日本民族で最も根強く伝えられ、また多様な変化をしてきた代表的な昔話・伝説である。このタイプのもっとも古い記録は、日本民族では八世紀の『古事記』、『日本書紀』や古風土記に多く記され、漢族では唐時代の『宣実志』、朝鮮族では十三世紀の、『三国遺事』に見えていて、東アジアの中心をなすこれら水田稲作の三の民族を代表する神話・民間説話といえる。娘を訪れる異類は、蛇（日本）、蟾蜍（すくもむし、漢）、蚯蚓（朝鮮）異なるが、いずれも土の中や洞などに住む細長い異類である⁴。

このような指摘を考えると、日本と韓国「針糸」型の話を比較・検討することは、両国の昔話の共有地域解明につながる事が期待される。

蛇婚姻譚は日本の場合「蛇女房」譚と、「蛇婿入り」譚が全国的に分布しているが、韓国の場合には「蛇女房」譚が少ない一方、「蛇婿入り」譚である「針と大蛇」の話は「蛇女房」譚より広く分布している。ただし、後述のように本論文でテキストとして用いる韓国精神文化研究院編『韓国口碑文学大系』には、日本の「蛇婿入り」譚の「針糸」型の話と似ている話で、婿が蛇ではない別の動物である話が多い。それらの話は正確に言えば「蛇婿入り」譚の「針糸」型の話と言えないが、その形態においては、日本の「蛇婿入り譚」の「針糸」型の話と類似している。

本論文のテキストとして日本の昔話については、小沢俊夫・稲田浩二の『日本昔話通観』（全29巻）⁵と関敬吾編『日本昔話大成』（全10巻）⁶を使用する。また韓国の昔話については、任哲宰編『韓国口傳説話』（全12巻）⁷と韓国精神文化研究院編『韓国口碑文学大系』（全82巻）⁸を使用する。『日本昔話通観』は1920年から採集したものであり、また韓国の『韓国口傳説話』も1918年から1965年まで採集した話を整理しているものである。すなわち日韓両国で、ほぼ同じ時代に採集した資料である。しかし『韓国口傳説話』の例は日本の資料と比べるときわめて少ないので、本論文では、韓国精神文化研究院編『韓国口碑文学大系』もテキストとして使用する。

2、先行研究

日本と韓国の蛇婚姻譚に関する先行研究には、まず関敬吾の論文、「蛇婿入り譚の分布」、⁹小澤俊夫の著書『昔話のコスモロジー、ひとと動物との婚姻譚』¹⁰、小澤俊夫の論文「蛇婿入り譚の分析」、¹¹百田弥栄子の論文「中国の三輪山神話－蛇婿入り譚と交叉して－」¹²、福田晃の論文「昔話の発

生と伝播」¹³がある。

関の「蛇婿入り譚の分布」では、日本の各地域の「蛇婿入り」譚を紹介し、分布図を作成し、日本のなかでの話の地域的変化が研究されている。小澤の『昔話のコスモロジー』では、動物夫譚、動物女房譚、異類婚姻譚からみた日本昔話の特質などが研究されているが、世界、特にフランス、ドイツの話をも日本の話と比較している。また小澤の「蛇婿入り譚の分析」では、日本の「蛇婿入り」譚を話型別に分析しながら、三輪山伝説の話に関してその由来を分析している。百田の「中国の三輪山神話」では、中国各地域の「蛇婿入り」の話型の一つである「苧環」¹⁴（針糸型）型の分布地域の紹介と話内容を論じている。また福田の「昔話の発生と伝播」では、日本の「蛇婿入り・苧環型」について、中国や韓国などとの関係を論じ、その源流を中国に求めている。

以上の先行研究からみると、現在分かっている限りでは、日本と韓国の蛇婚姻譚を比較し、両国の社会性の特徴から論じている研究は見当たらない。また、本論文で目指している共有地域から両国の社会や文化の特質を明らかにしている論文も見当たらない。そのため、この点に関する研究は必要であり、今後の研究課題としてまだ残されていると言える。

3、日・韓の周辺国における蛇婚姻譚の「針糸」型

福田は、日本の「蛇婿入り」譚の「針糸」型（苧環型）について、韓国の北部（北朝鮮）やベトナムの事例にも目を配ったうえで、中国をその源流と認めている¹⁵。また、百田は中国の「針糸」型の話には三つの型があると指摘している。

- 1、糸をたどると先にいたのがゲジゲジやヒユ、蛇の精、蟒、シロザの葉、ツルドクタミ等で、池に石灰を撒き沸騰した油を注ぐ等して殺し、娘も雄黄酒を飲んで子を降ろす等という伝承。（黒竜省から四川省までの広い地域に流布する漢族の伝承）
- 2、糸の先にいたのは鰻やスッポン、亀で、娘はその「遺骨を隠」し、子（その子孫）が「父の遺骨を龍に食わせ」たり、「風水の良い川辺の神龍の角に掛け」たりして、後の宋の太祖となるという趙匡胤の尊い出自を語る伝承。（漢族の伝承）
- 3、三輪山神話と同様に聖なる祖をもつ子孫の伝説的な物語を語る伝承¹⁶。

百田は日本の三輪山神話との関係から、中国の三つの話型に注目している。中国の三つの話型は、中国の彝族を中心とする昔話であり、地域的には中国西南部の雲南省を中心に四川省・貴州省の地域にある話だという。この彝族の話型は「蛇婿入り」譚であり、その「蛇」を登場させている理由についても、百田は詳しく説明し、そのうえでこの彝族の「蛇婿入り」譚から、「今の“資料の範囲”で彝族の間に流布する〈苧環の糸〉型の類話が、私を三輪山説話へと誘うのである」¹⁷と結論付けている。

このような既存の研究を踏まえて日韓両国の話を検討するが、筆者は今の中国の「針糸」型の話に出てくる生き物にも注目したいと考えている。中国の話には「蛇」だけではなく、ゲジゲジやヒ

ユ、蛇の精、蟒、シロザの葉、ツルドクタミ、獺、スッポン、亀などの動物も登場している¹⁸。このような多くの動物が登場する中国の「針糸」型の話が、日本と韓国の「針糸」型の話とどのような関係にあるのかにも目を配ってうえで日韓両国の「針糸」型の話を見ていきたい。

4、日・韓の蛇婚姻譚類「針糸」型の概要

韓国の「針糸」型の話には色々な生き物が登場しているが、日本の場合は蛇だけである。そこで、中国の話との関係を考えて、先に韓国の話を考察した上、日本の話を考察して両国の話を検討して行きたいと考える。

(1) 韓国の蛇（異類）婚姻譚「針糸」型

まず、韓国の文献においてもっとも古いと考えらる「針糸」型の話は、高麗の忠烈王11年（1285年）に僧侶一然によって編纂された、韓国最古の歴史書の一つ『三国遺事』¹⁹に見られる。そこには後百済の始祖「甄萱」（?～936年）について次のような記録がある。

後百済 甄萱

三國史本傳云。甄萱尚州加恩縣人也。咸通八年丁亥生。本性李。後以甄爲氏。

又古記云。昔一富人居光州北村。有一女子。姿容端正。謂父曰。每有一紫衣男至寢交婚。父謂曰。汝以長絲貫針刺其衣。徒之。至明尋絲於北牆下。針刺於大蚯蚓之腰。後因妊生一男。年十五。自稱甄萱。至景福元年壬子稱王。立都於完山郡。理四十三年。以清泰元年甲午。萱之三子篡逆。萱投太祖。子金剛即位。天福元年丙申。與高麗兵會戰於一善郡²⁰。

この記録に言う『古記』の部分を読すれば、次のような内容になる。

『古記』にはこういっている。すなわち昔、一人の金持ちが光州の北村に住んでいた。娘がひとりいて容姿が端正であった。娘が父にいうには、「いつも紫色の着物をきた男が寝屋に来て共寝をします」。父親はこう答えた。「長い糸を針に通しておいて、その男の着物に刺しておきなさい」。そのとおりして、夜が明けてから糸をたどって行くと、北がわの堀の下にある大きい蚯蚓の横腹に針が刺さっていた。その後、身ごもって一人の男の子を産んだ。その子が十五歳になると、自分を甄萱と呼んだ。景福（唐の昭宗の年号）元年壬子（八九二年）には王を名のり、都を完山郡（今の全羅北道全州）に定めた。国を治めること四十三年、清泰（後唐の廢帝の年号）元年甲午（九三四年）に、萱の三人の子が反逆したので、萱は（高麗の）太祖に降服した。そこで子供の金剛（神劔の誤記）が即位したが、天福（後晋の高祖の年号）元年丙申（九三六年）に、高麗軍と一善郡で会戦して敗れ、ついに国が滅んでしまったという²¹。

この『古記』の内容を見ると、甄萱の出生譚が「針糸」型の話になっていることが分かる。それ

を整理すると、次のようになる。

- ①娘が父に、いつも紫色の着物をきた男が寝屋に来て共寝をすると話す。
- ②父親は、長い糸を針に通して、その針を男の着物に刺しておきなさいという。
- ③そのとおりにして、夜が明けてから糸をたどって行くと、北側の塀の下にある大きい蚯蚓の横腹に針が刺さっていた。
- ④その後、娘は身ごもって一人の男の子を産んだ。
- ⑤その子が十五歳になると、自分を甄萱と呼んだ。

この『三国遺史』に載っている、甄萱の出生を巡る「針糸」型の話から考えると、韓国における「針糸」型の話の歴史がどれほど長いのが分かる。これについては後でもう少し言及する。その歴史の長さを考えると『三国遺史』にあるような「針糸」型の話は韓国において全国的に広く分布する昔話であると予想されるが、実はそうではない。限定された地域でのみ確認される話である。まず、『韓国口碑文学大系』を見ると、全羅北道沃溝郡の「甄萱は蚯蚓の子」²²という話がある。

＊「甄萱は蚯蚓の子」（全羅北道沃溝郡）

- ①未亡人となった女の家、男が夜になると訪ねてくる。
- ②子が出来た女は、男の正体を知りたくて、糸を通した針を男の着物に刺す。
- ③翌朝糸をたどっていくと、裏庭の土の中に入っている。
- ④掘ってみると蚯蚓がいる。
- ⑤子供を産むと、その子が後百済の始祖になる。

この全羅北道沃溝郡の「針糸」型の話は、タイトルとその内容から見て、『三国遺史』の甄萱の出生を巡る「針糸」型の話がそのまま伝わったものであることは明らかである。このような話は崔仁鶴著の『朝鮮伝説集』にも見ることができる。

＊「蚯蚓の子」（全羅南道光州）

- ①全羅南道光州の来尾谷のある村の長者の家の娘の所に毎晩男が忍び込んで、一緒に寝て帰る。
- ②娘は自分の体に異常を感じ親に話すと、父は男が来たら糸をつけた針を彼の裾に差しなさいという。
- ③翌朝糸を辿っていくと垣の下に蚯蚓がいて針に刺されていた。
- ④娘は男の子を産んで、成長し、十五歳になったとき、自ら名を甄萱とし、後百済の王になったという²³。

同じ甄萱の出生を巡る「針糸」型の話ではあるが、登場する生き物が「蚯蚓」ではない話もある。

地域的に見ると、甄萱が王として支配した後百済の地である全羅北道と全羅南道に口伝されており、この地域におけるこの話の根強さを感じさせる。このように甄萱の出生を巡る「針糸」型の話だが、甄萱と関係のない「針糸」型の話も韓国のある所々で登場する。こういう話は間違いなく甄萱の出生を巡る「針糸」型の話と関わりを持っているのであろう。甄萱は一国の王になった人物で、韓国の人々の間で「針糸」型の話は、自分達と同性の人が甄萱のような偉人であると思うために語り伝えられたと考えられる。そのため「針糸」型の話には「蚯蚓」の他に、「豚」²⁴「亀」²⁵、「貝」²⁶、「魚龍」²⁷、「童蓼」²⁸、「川獺」、「蛇」などが登場する話もある。以下、「川獺」、「蛇」の話の例を示す。

＊「清太祖」（咸鏡北道会寧）²⁹、

- ①咸鏡北道会寧の村の李座首という土豪家の一人娘のお腹が突然大きくなったので親が問いただすと、見知らぬ男が毎晩訪ねて来ると言う。
- ②親は娘に、次に男が来たら糸を服に縫いつけるように言いつける。
- ③翌朝、糸先を辿って見ると、糸は豆満江岸近くの池の中に入って行った。
- ④水を全部汲みだすと、大きな川獺がいたので、李座首は川獺を叩き殺す。
- ⑤その後、娘は子を産んで、名をヌルハチとして育てる。
- ⑥ヌルハチは結婚して三人の男の子を得た。三人目の子は賢い子で後に清国の太祖になった。

＊「夜来者」（慶尚南道東萊）³⁰

- ①慶尚南道東萊の長者の一人娘の所に少年が忍び込み、夜明け前に立ち去る。
- ②父が娘の部屋に男の影が映っているのをみて、娘を問いただすと娘は全部話す。
- ③父は針に糸をつけて、その針を袖に刺すように教える。
- ④翌朝糸を辿っていくと、裏山の森のなかの穴で大きい青大將が死んでいる。

「清太祖」譚（咸鏡北道会寧の「老獺椎」）は、子孫が清国の太祖になるという内容から見ると、中国の「宋の太祖となった趙匡胤の尊い出自を語る伝承」³¹と関わりを持っていると言えよう。また、忠清南道扶余郡の「夜来者」譚の内容も、中国の話と共通点を持っていると言えよう。そして、江原道平康郡、横城郡の亀の話「蔡氏沼」は、平康・蔡氏の始祖になったという話があり、慶尙北道月城郡の「貝の子」には、曹氏の始祖の出自が語られているが、これらの話も中国の宋の太祖趙匡胤話³²と無関係ではないと言える。このような韓国に伝承されている「針糸」型から見ると、福田が指摘しているように、中国の話をその源流としている可能性が伺われる³³。

(2) 日本の蛇婚姻譚の「針糸」型

日本の「蛇婿入り」譚の話は日本全国に伝えられている話である。『日本昔話通観』によると蛇婿入り譚の話は、糸の先を辿って行って蛇を殺す方法の話を聞く「立ち聞き」型、蛇が水不足の田に水を供給する代わりに娘を要求する話である「水乞い・嫁入り」型、「退治」型、「針糸」型等、色々

な型で語られている。ここでは韓国の話と類似している「針糸」型の話と比較検討する。「針糸」型の話は韓国のように日本の古記である『古事記』に記録として伝えている。また、日本の『古事記』に収められた「針糸」型の話の内容も韓国の『三国遺史』に載っている、甄萱の出生を巡る「針糸」型の話と似ている。

まず、『日本昔話通観』にある「針糸」型の話を整理解する。

1) 「針糸」型の蛇死ぬの話と節句の菖蒲湯の由来の話

『日本昔話通観』で「針糸」型と分類されている話では、蛇が針に刺されて死ぬ譚と蛇の子を菖蒲湯で墮胎する話がある。この話は日本全国に広く分布している。

* 蛇死ぬ譚

蛇死ぬ話は、話の最後に話の中心的役割を負う蛇が針に刺されて死ぬことで話が終わる。この話は日本全地域に分布している。地域別に色々な話が伝わっているが、簡単に整理してみると次のようである。

- ①娘が年頃になると、男が夜に通ってくる。
- ②娘は母の進言で糸を通した針を男の着物につけておく。
- ③翌朝、糸をたどって行くと、蛇が急所を刺され倒れている。

* 節句の菖蒲湯の由来譚

菖蒲湯の由来譚は、蛇を殺して蛇の子を菖蒲湯で墮胎し、菖蒲湯が五月の節句の風習になるという話である。菖蒲湯の由来譚も日本全地域に分布しているが、蛇の子を墮胎する方法は地域によって、菖蒲と蓬、かやの湯、桃酒、菊酒なる。話の筋を簡単に整理すると、次のようである。

- ①娘が年頃になり、男が夜に通ってくる。
- ②娘は母の進言で糸を通した針を着物につけておく。
- ③翌朝、糸をたどって行くと、蛇が急所を刺され倒れている。
- ④娘が蛇の子を産む時に、菖蒲(と蓬とかやとの三つ)を束にして湯の中に入れ蛇の子を死産する。
- ⑤それ(三つのもの)を祭るのが昔からの習慣になる。

2) 「子供出世」型

「子供出世」型の話は、韓国の氏族集団の始祖由来譚と類似しているが、韓国の場合は娘の相手となる生き物として、蛇だけではなく亀や、貝、豚なども登場する。しかし話の筋は同じである。日本の「子供出世」型の代表的パターンは以下の通りである。

* 岩手県下閉伊郡³⁴

- ①娘のもとへ毎晩若者が通ってくる。
- ②母が娘に、糸を通した針を衣服の襟に突き刺すようにいう。
- ③翌朝糸をたぐっていくと、山奥の岩に行き着く。
- ④蛇が倒れており、自分は蛇で針に刺されたので死ぬが、死んだらここにお宮を建ててほしいという。
- ⑤身ごもった子は大事に育てくれという。
- ⑥娘は子を産み、その子は偉い人になる。

このような「子供出世」型の話は、『日本昔話通観』をみると岩手県以外には、新潟県南蒲原郡³⁵、愛知県北設楽郡³⁶、愛知県名古屋市³⁷、山口県大島郡³⁸、熊本県阿蘇郡³⁹に残っている。

以上のような日本の「針糸」型の話としてもっとも古いものが、『古事記』の「三輪山伝説」である。その内容は、以下のとおりである。

この意富多々泥古といふ人を、神の子と知るゆゑは、上にいへる活玉依日毘売、その容姿端正しくありき。ここに壮夫有り。その形姿威儀、時に比ひなし。夜半の時にたちまちに到来る。かれ、相感でて、共婚ひして、共住る間、あまだいくだもあらねば、その美人妊身みぬ。しかして、父母その妊身める事を恠しびて、その女に問ひて曰ひしく、
「なはおのづからに妊めり。夫なきに何のゆゑにか妊身める」答えて曰ひしく、
「麗美しき壮夫あり。その姓名も知らず、夕こと到来りて共住める間におのづらに懷妊みぬ」
ここをもちて、その父母、その人を知らむとおもひて、その女に誨へて曰ひしく、
「赤土もちて床の前に散らし、へその紡麻もちて針に貫き、その衣の欄に刺せ」
かれ、教へのごとくして、旦時に見れば、針著けたる麻は、戸の鉤穴より控き通りて出でて、ただ遺れる麻は三勾のみなりき。しかしてすなち、鉤穴より出でし状を知りて、糸のまにまに尋ね行けば、美和山に至りて神の杜に留りき。かれ、それ神の子とは知りぬ。かれ、その麻の三勾遣りしによりて、そこを名けて、美和といふなり（この意富多々泥古の命は、神の君・鴨の君が祖ぞ）⁴⁰。

この話の展開が現在伝わっている「針糸」型の話と似ているのが分かる。小澤俊夫は、この『古事記』の伝説が、民衆のあいだで昔話として口伝えて語られてきたと述べている⁴¹。このように見ると、「針糸」型の話が日本でどれほど長い歴史を持っているのが分かる。ところで、『古事記』の「三輪山伝説」では、娘のところに夜訪ねてくる男が「神の子」となっているが、現在まで伝わっている昔話では普通の蛇になっている。この点については、小澤は以下のように述べている。

むしろ、日本人は蛇から神性を奪い取ってのち、自然のなかのあの蛇として、ごく日常的な感

覚で蛇を感じとり、そうした蛇が若者として夜ばいしてきたこと、そうした蛇が針で死ぬこと、そうした蛇の子が桃酒などによっておろされること自体に、おそろしさと同時に文芸的快感と興味をかんじてきたのではなかろうか⁴²。

小澤俊夫は、昔話における蛇からの神性の奪取を、文芸的快感と興味の立場から見ている。しかし、昔話が社会の中で生まれている限り、何らかの形でその社会の雰囲気反映されていることは間違いないであろう。従って、昔話における蛇からの神性の奪取には当然それ相応の社会的背景があったと考えられる。ただ、その詳細はまだ不明であり、今の時点で分かるのは、伝説から蛇婚姻譚の昔話に変わった時は、蛇には「神の子」的イメージがない社会に変わっていたということである。

5、日韓両国の「針糸」型の比較・検討

日韓両国の「針糸」型の話を論ずる前に、中国の話との関係を少し考えてみたい。もし、中国の「針糸」型を源流とすれば、韓国の話の場合は十分理解できる。話の内容や登場する生き物等が、中国の話と重なっているからである。しかし、日本の話の場合は簡単には理解できない部分がある。内容からすれば中国の話と関わりを持つ可能性があると言えるが、日本の話には「蛇」しか登場していないからである。日本には中国の彝族の「蛇婿入り」譚しか伝播していないとすれば、一番納得のいく説明になろうが、そのような伝播の説明はできない。この点については今後の課題にしたい。いずれにせよ、現在の状況では中国の「針糸」型を源流とみとうえて日韓両国の話を論ずることは難しい。そこで本論文では日本と韓国の話にだけ制限して検討していきたいと考える。

韓国の話の中でも、前述した咸鏡北道に伝わる清太祖の話は中国の影響を強く受けている。咸鏡北道は韓国の北の方で中国と国境地域であるので、中国の影響を受けたと見るのは考えられることである。しかし韓国における「針糸」型の話の中心は「甄萱の誕生」を巡る話だと言わざるを得ない。そこで、本論文ではまず、韓国の甄萱の話と日本の「針糸」型の話を比較・検討したい。

韓国の甄萱の話と日本の「針糸」型の話を比較すれば、蚯蚓と蛇の違いはあるが、その内容は類似している。内容から見ると、甄萱の出自を語る韓国の「針糸」型は日本の昔話の「子供出世」型に当たる『日本昔話通観』を見る限り、日本全国に流布する蛇婚姻譚のなかでの「子供出世」型は前節で示した6つの話がすべてであり、従って日本の「蛇婿入り」譚の中では少数派である。しかし、この日本の「子供出世」型も『古事記』の伝説と関わりを持っているのは確かであり、また「子供出世」型には、その出世という内容から見て、『古事記』の伝説の「神の子」のイメージも少し残っているといえる。韓国の甄萱の話は『三国遺史』の話そのままなので、こういった点からすれば、日本の「子供出世」型と韓国の甄萱の「針糸」型は、『古事記』の伝説と『三国遺史』の伝説の段階において既に共通の昔話を持っていたといえることができる。

しかし、先に指摘したとおりに、両方の「針糸」型に登場する生き物が蚯蚓と蛇という大きな違いがある。ただ、前述した稲田が「訪れる異類は、蛇（日本）、蟾蜍（すくもむし、漢）、蚯蚓（朝鮮）異なるが、いずれも土の中や洞などに住む細長い異類である」⁴³と指摘しているように、これ

を一つのイメージとして見る事ができるならば、「針糸」型の話においてはそれほど大きな問題ではなくなる。関敬吾は「この若い男が娘の処に通うというのは、過去の婚姻習俗を反映するものであって、かかる婚姻形式は現代の嫁入婚とは相違するが、中世に於て最も普通に行われた婿入婚の一形式である」⁴⁴と述べている。実は、日本のこの過去の婿入り婚の婚姻習俗と似たような婚姻習俗が古代の韓国にもあった。『韓国文化史大系、7—風俗・芸術史（上）—』では三国時代の家族制度の結婚形態、特に高句麗（BC37—668）の婚姻習俗について、以下のような記述がある。

男女の間で婚談が成立すると女家では家の後ろに小屋を作って婿屋という。日暮に婿が家の外に来て女子と同宿することを懇願すると女側の親が承諾し、婿屋に案内して同宿する。婿はその時、銭と幣物（幣帛）を提供する。子供を生んで大きくなると男は妻と子を連れて本家に行く⁴⁵。

後百済の地域は高句麗の地域とは違うが、同じ時期に高句麗にあった婚姻習俗がその周りの地域にも存在した可能性は十分あるのである。実際、『三国遺史』の甄萱の話は、当時の高句麗以外にあった婿入りの婚姻習俗の資料にもなる。

こうして見ると、両国の「針糸」型の背景には、同様に婿入りの婚姻習俗があったことになる。このような婚姻習俗の中で、「針糸」型の話を作り、その中で男性のイメージとして、長いものに意味を置いたかどうかは分からないが、蛇と蚯蚓を考えたのであろう。従って、その両国の「針糸」型の話の伝播関係等は別として、両国の話は、蛇と蚯蚓の違いはあるが、婿入りの婚姻習俗を背景にした共通の昔話のものとしてみても差し支えないと考える。

『古事記』に端を発した日本の「針糸」型の話は日本全国に広く分布している。しかし、韓国の甄萱の「針糸」型の話は『三国遺史』に収められているほどにその歴史が長い、現在に至るまで口伝されてきている話は多くない。それは何故であろうか。その理由の一つとして、朝鮮時代という強力な儒教社会を挙げることができる。男性中心の強力な儒教社会を経る中で、婿入りの婚姻習俗を背景にした「針糸」型の話が自然消滅した可能性は十分考えられる。韓国の甄萱の「針糸」型の話が、非常に長い歴史を持っていながらも、現在辛うじて甄萱に縁の地にのみ伝わっていることを考えると、実はその背景として朝鮮という王朝と、儒教という強力な社会的要素以外の要因は考えられないのである。韓国における昔話の口伝過程からすれば、昔話がどれほど社会的条件に影響されるのかという、昔話の一側面を見ることができる。

先に、甄萱を巡る「針糸」型の話が、現在は辛うじて甄萱に縁のある地にのみ伝わっていると述べたが、儒教という社会状況を考えると、逆にその地域の伝説として、社会状況に影響されことなく、堂々と伝えられてきたとも思われる。また、甄萱に縁の地は百済の地域として、過去の日本とも深い関係にある場所であった。両国の共通の昔話としての「針糸」型の背景には、それぞれの国の婿入りの婚姻習俗だけではなく、百済と日本の深い関係も一つの要素として働いたかもしれない。

また両国の共通の昔話世界という面から見れば、韓国の忠清南道扶余郡の「魚龍」が登場する話と、慶尚南道東萊の「蛇」が登場する話もその補充資料として使える。「魚龍」と「蛇」という登場する動物だけではなく、忠清南道扶余郡は昔の百済の地域であり、慶尚南道東萊は韓国の南の日本と関わりがある地域だからである。

最後に、資料を検討する中で一つ気づいた点がある。兵庫県美方郡の節句の菖蒲湯の由来譚の中に、「娘が蛇の子を産む時に菖蒲と蓬とかやとの三つを束にして湯の中に入れるようにする」⁴⁶という内容がある。ここでは「菖蒲」と「蓬」と「かや」という三つの草が挙げられている。ところが、「菖蒲」と「蓬」は他の話にも出てくるが、「かや」はこの兵庫県美方郡の話にしか出てこない。「かや」というのは特別な草ではないが、実は、甄萱（甄：姓、萱：名）の「萱」の字の意味が「かや」である。特別にその関係を説明できるようなものは何もないが、両国の「針糸」型の話の中にこのような偶然があったので挙げておく。勿論、両国の「針糸」型の関係如何によっては、それが単なる偶然ではなく、何かの意味を持つものになる可能性は十分あるのである。

以上で、韓国の「針糸」型の話と日本の「針糸」型、特に「子供出世」型の話とを比較し検討してみた。その結果として、両国の「針糸」型に 蚯蚓と蛇との違いはあるものの、話の内容、その背景としての婚姻習俗から見て、両国の話の関係如何に関係なく、共通の昔話世界を持つものとして認めることができた。また、この両国の「針糸」型の共通の昔話は、遠い昔の古代日本と百済の時代において既に存在していたということになる。これが何を意味するかは今の段階で明らかにすることはできないが、その背景に古代日本と百済の関係が働いている可能性もある。

今回の考察で明らかになったのは、「日本+韓国の南部地域」という昔話の共有地域の理由がもう一つ増えたことである。韓国の「針と大蛇」（蛇死ぬ話）と日本の「針糸」型の蛇死ぬ話と共有関係について、韓国の話の採集場所が慶南東萊郡龜浦（現在の釜山）である点から、日本に近いという地理的な特色から考えた。もう一つ言えることは、両国には比較可能な程度に相似する話型あるいは内容を持つ話がこれほど多くある。それは、両国が地理的に隣接しているだけでなく、文化の移動によって同じような文化を共有していた可能性もあるからであろう。しかし、にもかかわらず両国の話には両国の社会的特性が鮮明に現れていることも見ることができる。ところが、今回の考察によれば、日本と韓国の昔話の共有地域の背景として、歴史的関係も見逃せない要素だということが分かった。これは今回の考察で得た大きな収穫だといえる。

注

- 1 本論文では、現在の大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の全体を示し、時間的・空間的に朝鮮半島全体を表す名称として「韓国」という名称を使う。1897年に朝鮮から大韓帝国へとその国名が変わり、またこの大韓帝国を継承する形で大韓民国という国名があるが、歴史的・地理的全体性を示し、現在の国名の原点であるという意味において、大韓帝国の歴史を踏まえた韓国という名称が一番相応しいと考えるからである。
- 2 Thompson, 1964, 『The Types of the Folktale』 Helsinki, Suomalainen Tiedekatemia Academia Scientiarum Fennica。
- 3 関敬吾著、1950、『日本昔話集成』角川書店。

- 4 稲田浩二・稲田和子、2011、『日本昔話ハンドブック』三省堂、31頁。
- 5 稲田浩二・小澤俊夫編、1977～1990、『日本昔話通観』全29巻 同朋舎出版。
- 6 関敬吾著、1978～1980、『日本昔話大成』（全10巻）角川書店。
- 7 任哲宰編、1990、『韓国口傳説話』全12巻 평민사（平民社）。
- 8 韓国精神文化研究院編、1982～1988、『韓国口碑文学大系』全82巻、韓国精神文化研究院。
- 9 関敬吾、1980、「蛇婿入譚の分布」、『関敬吾著作集—日本昔話の比較研究—』第4巻、同朋舎出版、2～58頁。
- 10 小澤俊夫、1997、『昔話のコスモロジー、一ひとと動物との婚姻譚—』講談社。
- 11 小澤俊夫、1980、「蛇婿入り譚の分析」、『国文学解釈と鑑賞』第40号、至文堂、44～51頁。
- 12 百田弥栄子、1993、「中国の三輪山神話—蛇婿入譚と交叉して—」、『説話・伝承学』第18号、説話・伝承学出版、27～39頁。
- 13 福田晃、1984、「昔話の発生と伝播」関敬吾監修『日本昔話研究集成』第2巻、名著出版、2～22頁。
- 14 「苧環型」とあるのは、先行研究における昔話の分類方法に基づいている。関敬吾が「蛇婿入り」譚を『日本昔話集成』で「蛇婿入り・苧環型」として分類しているが、稲田・小沢編の『日本昔話通観』では、「針糸」型として分類しており、百田が前者の分類方法に倣ったためである。本論文では主なテキストとして用いている『日本昔話通観』の分類に従う。
- 15 福田晃「昔話の発生と伝播」、9頁。
- 16 同上、2～22頁。
- 17 同上、28頁。
- 18 百田弥栄子「中国の三輪山神話—蛇婿入譚と交叉して—」、31頁。
- 19 高麗25代忠烈王11年（1285年）に、僧侶の一然が、古朝鮮を始めとして、新羅、百濟、高句麗と後三国の歴史、神話、伝説、郷歌等を記録した韓国の一番古い歴史書の一つ。
- 20 一然著、1984、崔南善編『三国遺事』三中堂書店。
- 21 金思燁訳、1976、『三国遺事』朝日新聞社、178頁。
- 22 『韓国口碑文学大系』5集4、693～695頁。
- 23 崔仁鶴著、1977、『朝鮮伝説集』日本放送出版協会、210頁。
- 24 『韓国口碑文学大系』5集6、637～640頁。
- 25 崔『朝鮮伝説集』、208頁。（この話では、夜に来る男の正体は亀で、子は大きくなって亀を意味する蔡を姓とし、平康・蔡氏の始祖になる。）
- 26 『韓国口碑文学大系』7集1、450～454頁。（この話では生まれた子は曹氏の始祖になる。）
- 27 崔『朝鮮伝説集』、211～212頁。
- 28 同上、213頁。
- 29 『韓国口傳説話』4巻34～40頁。（崔『朝鮮伝説集』、209頁には、「老頼椎」という題目で似た話がある。）
- 30 同上、213頁。（慶尚南道東萊、1929年採集）
- 31 百田「中国の三輪山神話」、27頁。
- 32 同上、30～31頁。
- 33 福田晃「昔話の発生と伝播」、2～22頁。
- 34 『日本昔話通観』3巻、13頁。
- 35 同上10巻、89頁。
- 36 同上13巻、28頁。
- 37 同上13巻、28頁。
- 38 同上20巻、106頁。
- 39 同上24巻、55～56頁。

- 40 西宮一民 校注『古事記』新湖社、1985年、136－137頁。
- 41 『日本昔話通観』24巻、90頁。
- 42 同上、93頁。
- 43 稲田浩二・稲田和子『日本昔話ハンドブック』、31頁。
- 44 関「蛇婿入譚の分布」、47－48頁。
- 45 洪 一植（ホン イルシキ）、1981、「韓国家族制度史」、『韓国文化史大系、7－風俗・芸術史（上）一』、高麗大学校民族文化研究所、434頁。
- 46 『日本昔話通観』16巻、29－30頁。

テキスト

日本

- ・稲田浩二・小澤俊夫編、1977年～1990年『日本昔話通観』全29巻 同朋舎出版。

韓国

- ・한국정신문화연구원、1980－1988年『한국구비문학대계』（全82巻）한국정신문화연구원、（韓国精神文化研究院、『韓国口碑文学大系』）。
- ・任哲宰編『韓国口傳說話』全12巻 평민사（平民社）1990年。

参考文献

- ・小澤俊夫、1997年『昔話のコスモロジー、一ひとと動物との婚姻譚一』講談社。
- ・百田弥栄子、1993年「中国の三輪山神話－蛇婿入譚と交叉して－」、『説話・伝承学』第18号、説話・伝承学出版。
- ・関敬吾、1977年『日本の昔話－比較研究序説一』日本放送出版協会。
- ・関敬吾、1978～1980年『日本昔話大成』（全10巻）角川書店。
- ・金思燁訳、1976年『三国遺事』朝日新聞社発行。
- ・崔仁鶴著、1977年『朝鮮伝説集』日本放送出版協会。
- ・崔仁鶴著、1976年『韓国昔話の研究』。
- ・洪 一植、1981年『韓国文化史大系、7－風俗・芸術史（上）一』『韓国家族制度史』、高麗大学校民族文化研究所、434頁。